

## 「カンボジアの人たちの輝く目、忘れない」

初代青年海外協力隊員 大樫哲生さん

日本から、初代となる青年海外協力隊員の派遣が決まったのが1965年、今年で50年になる。現在、埼玉県に住む大樫（おおもみ）哲生さん（78）は、「柔道隊員」として1967年1月にカンボジアに渡った初代協力隊員の一人だ。

エールフランス機で香港を経由し、約7時間のフライトで到着したカンボジアは、気温30度以上。むっとする熱風に「遠い南国へ来た」と実感した、と話す。

大樫さんは到着翌日からさっそくプノンペン市内にあった5つの柔道クラブを巡回して指導を始めた。当時のカンボジアでは柔道は人気があり、子供から大人までさまざまなクラブで練習をしていたという。「娯楽が少ないこともあり、どちらかという社交の場のようにぎやかでした」

柔道への関心が高かったエピソードがある。大樫さんが「カンボジア軍人クラブ」で10人ほどを相手に乱取り稽古を始めたところ、その情報が一気に広まり、道場の窓が見物客ですずなりになった。窓という窓がふさがったため、ただでさえ暑い道場内は真っ暗な蒸し風呂に。そんな過酷な環境下での指導が続き、大樫さんの体重は滞在中10キロ近く減ってしまった。だ



が、「汗だくになりながらも、私のアドバイスを聞き逃すまいと目を輝かせていた姿は忘れられない」と言う。

大樫さんは2年の任期を1年延長し、3年1カ月間滞在了。その直後からカンボジア情勢は不安定になり、長い内戦と混乱の時代が始まる。大樫さんは「私がいるころ、ベトナムは大変な状態でしたが、カンボジアはとにかく平和で静かで清潔な国でした。離任して間もなくあのようなことになるとは驚きでした」と語る。

当時の教え子たちの行方は、残念ながらほとんどわからない。ただ、今も交流がある弟子たちが3人おり、台湾、ベトナム、オーストラリアに在住している。中でも、オーストラリアのシドニー在住の男性との交流は厚く、彼は現地に「OOMOMI講道館」と名付けた道場を開いたほどだ。

カンボジア派遣後も、大樫さんはマダガスカル、インドネシア、バングラデシュなど世界各地に柔道の指導で赴いた。

「初代隊員として、世界平和に貢献するのだ、という目的のもと派遣されましたが、青年海外協力隊というのは、現在のグローバル化を先取りした人材育成だったのではないかと思います」と、大樫さんは言う。「資源の少ない日本という国が国際社会で生き抜いていくためには、いろいろな国の人々としっかり交流し、理解し合うことが大切です。協力隊の活動はそのことを教えてくれる。今まで以上に、若い人がどんどん外へ出てそんな経験を積んでくれることを期待しています」

（写真は、カンボジア政府より騎士章を授与される大樫さん=右）